
Private aqua Room

松本 桂花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P r i v a t e a q u a R o o m

【Nコード】

N 3 1 5 1 P

【作者名】

松本 桂花

【あらすじ】

注意 ルーズリーフに草書してないうえ校正とかやってませんよまた。こんなのが3回目です。思い立って殴り書きその？病んでない「私」です。

結ばれなさすぎて非常に不憫でかわいそうなので水族館デートさせました。

ちなみに「私」はプライド高い設定なんですが、内の目を「私」におくとアホの子みたいです。

書き方変えてみました。

一緒に出掛けてくれる？

日曜日に？

…自惚れるな自分、きっと夕飯の買い出しとかだ。

橘と遊びに行けるなんて、幻想に決まってる。

期待するだけ無駄だわ。

わはははは。

そんな事を3日前の私は思っていたわけで、現在進行形の私がどこにいるか予想できなかった。

in水族館。

傍らに橘。

幻想だわよ、橘が私とデートまがいの外出をしてくれるなんて。きっと親が子供を連れていくみたいな感覚なんだろうね。

でも 海に沈む太陽を砂浜から眺めたり、非常に穏やかな時間を過ごして今は7時過ぎくらい。

夜の水族館は見渡せばカップルばかりだった。

私と橘はそーいう関係でもなく、ただ主と世話人という立場であるから館内にうようよいるカップルが妬ましかったり羨ましかったりするわけで

でもこんな感じの環境にいて時間をゆったり過ごしているんだから、そんな気分になってしまう。

私達って見たから見たらカップルだよな？

傍らでイルカを眺めている橘にそう尋ねようとした が、ふと我に返る。見上げるつもりが、俯いた。

わはははは、結局自惚れてるじゃない自分。カップルじゃないのに、契約上の関係なのにな。周りの人なんか他人を気にする余裕なんて

ないわよね好きな人と一緒にいるんだもん。他人を気にする余裕のある私とは違うんだもん。あーあなんかもう期待させないでよバカバカ。

ぼーっとイルカを見つめる橘は私がこんなに複雑な心境なのにきつと気づいていない。その綺麗な顔の滑らかなほっぺたをつねってやりたい。

私はこんなに橘に期待してるのにーって。ほっぺたをつねられるなんて期待してないでしょ？私も橘となにもない事を期待してないのよーって言いたかった。

でも、できない。

勝手に隔たりを造ってるのは自分なだけど。自分で造った隔たりに、後悔してるんだもん。バカバカしいわよ自分が。あーバカバカ。気づけよバカ、朴念仁め、なんでも出来る癖になんで私の気持ちは読み取れないのよバカバカ。

心の中で悪態をついていると、ふと、橘が肩を抱き寄せた。そんなことを予想しなかった私は盛大に橘によるける。私は文句を言おうと首をねじって橘を見上げる。端正な彼の、長い前髪に陰る瞳が見えた。

バカバカ言う自分がバカだった。

橘の目は、いつもの目とは違う。なんとなく 真剣な目のような、そんな気がした。

すぐドキドキした。いつもの橘じゃない気がしてしまう。

絶対に今の自分の気持ちはばれたくない。

さっきとは反対の事を考えながら私は橘の目を見つめた。視線がかちあう。やっぱり、目が違った。しかし橘はつ、と視線を外した。

「ほら、お嬢。」

そして青い水槽の中を指差した。

私は橘の指差した方向 いきなり水泡をまわってイルカが飛び込んできた。

「いま上でショーがあっているみたいです。上にいきませんか？」
飛び込んできたイルカはまた水槽から姿を消した。私は視線を水槽から周囲に移した。

確かに周りを見れば店の人くらいしかいない。上に人が集まっているのだろう。

つまり水槽前は私たちのプライベートスペースだ。

「…橘は行きたい？」

わがまま、言っていないのかな？

確かこの回で今日のイルカのショーは終わる。今行かなければ次ここに来ない限り見れない。

「お嬢にお任せしますよ。」

につこりと笑って橘はそう言ってくれた。その言葉を橘が私のわがままを許してくれたと認識した。

私は橘の手に触れた。筋張った男性的な、でも綺麗な手だ。私はすうと深呼吸してから、橘に本音を打ち明けた。

「*****ましよう。でも*****って*****して。」

橘は驚いたような目をした。しかしすぐに柔らかく微笑んで私を後から強く抱き寄せた。

「そんなお願いなら早く言ってくださいよ。喜んでさせてもらいます」

背中に感じる、橘の体温。彼の確かな熱を感じる。

今くらいだ、橘と擬似的恋人になれるのは。

イルカのショーなんていつでも見られる。今は橘を独占したい。

「人が来たら行きますよ。いいですね、一紗」

後ろから聞こえる橘のその言葉に嬉しくなる。

うふふふ。

苦しゅうない苦しゅうない。

「構わないわ。帰っても続けてくれる？」

その問いには、ぽんと頭に置かれた手が返事として返ってきた。わははは。冗談で言ったのに。嬉しすぎて涙が出るわ。

イルカは上にいるカップル達を楽しませている。
そして私たちは、イルカ達によって出来たプライベートな空間にいる。

他人から見ても、自分から見ても恋人だと思われたい。本当はこんな自己満的なことは許せなかった。

でもいまはただ、こうしていたい。すごく幸せだ。

どうしよう、幸せすぎて涙出てきた。鼻の奥がツーンとする。

私は少し浮いた涙を橋に気取られないようにそっと拭った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3151p/>

Private aqua Room

2010年12月5日09時23分発行